

目の前で数人が絡み合い、のたうち回っているのを、長い時間見ていた。それはとてもいけないことのように思った。もちろんそれは舞台の上（だけ）でのことで、身体表現とかダンスとか呼ばれるものであり、振付家や「ダンサー」自身が一定のコントロールの下で行っていることなのだから、そこに危険な事態が生じることはないだろう。もちろん自己や逸脱が生じるという危険がないわけではない。舞台というものは、そのように、一定の安全が保証されている場所だということは、暗黙の裡に前提されていると言ってよい。

にもかかわらず、この時間で恐ろしかったのは、即興的な要素も多分にあったであろう数名の動きの連続において、絡み合う動きが止まってしまうこと、誰かが外れ、逸れ、はぐれてしまって繋がりが断たれてしまうことだった。

実際、しばしば棒立ちになってしまった一人を、誰かが主に足首あたりを掴んで再び塊の中に引きずり込むことによって「回復」されていたことはあった。そのことによって、絡み合うというそのシーンは、滞りなく完遂されたわけだ。

それは、完遂されるべき営みだったのだろうか。蝕の状態にある円形と、半透明なスクリーンの中に横たわるステージの上で展開する舞台。それぞれについて舞台美術の新作は過去、未来、現在であると解説しているが、ステージ上で進行している行為が現在であると規定されている以上、それは瞬時に過去に化していくものだから、常に次の瞬間も同じ状態であることが求められている。それを生命体としての動的平衡と呼んでも、さらに少々飛躍させてオートポイエーシスと呼んでも許されるだろうが、そうであれば、その状態に外部があるかどうかということが大きな問題となる。

仮に現在のその絡み合いが、その構成員の中で完結しているものであれば、逸脱や誤謬が生じたかどうか、それがエラーであるかどうかは、何によって判断されるのだろうか。バグというこの作品の主題は、現在のこのシステム、ここにおいては社会的システムというよりは芸術的システムを外部から評価・判断する存在が前提されていると考えられるだろうか。

それがこの細長いステージの両端に置かれた、蝕を表わす円形のオブジェと、スクリーンであるのか、ステージの中に配置された直方体あるいは円形のウレタンであったのかはわからない。ぼくたち観客ではないような気がするが、では観客は内部であったのか。

ダンス、中でも物語を持たない抽象的なダンス作品を観る場合に、目の前で展開されていることが、何かの象徴として言語に帰すことが求められているのか、そうでないのかということさえも、観客に委ねられていると言っていいだろう。この絡み合いのたうち回る身体たちを現在の地球の、社会の、一人称的な状況の象徴として凝視した人もいただろうし、「絡み合っている状態を提出している」とカッコの中に入れて観る人もいるだろう。ぼくは大概後者だ。特にコンテンポラリーダンスでは、一人称の物語として受け取ることは稀だ。

この絡み合いの時間の中で、立ち尽くしてしまう延べ数人に対して、しかしながら、ぼく

は激しくぼく自身を投影することができていた。それは絡み合いという状態にあっては、バグだ。しかしそれは、内部において結果として屹立し、外部であろうとしてしまう存在であり、しかし瞬く間に回収されてしまい、再び内部の構成員に立ち返ってしまう存在だ。それが不幸であるとも言えないし、反動や裏切りであると批判することもできないのは、誰も外部ではありえないからだろう。そのような現在にあって、バグが初期のがん細胞のように克服されうる危機として存在しながら、実のところ克服されることなく潜伏し続けることを、予言する何ものかがあるのかもしれない。それが過去に属するのか未来に属するのかは、知らない。誰か、知っているのだろうか。

上念省三

演劇・舞踊評論家。1959年、兵庫県生まれ。上智大学文学部卒業。

「ダンスの時間プロジェクト」代表。神戸学院大学、近畿大学非常勤講師（芸術享受論実習、舞台芸術論等）。西宮市文化振興課アドバイザー。